

ばんけい

教育ほつとにゅーす

かわら版

こ みち
教育の小径

No.100

2017 February

2月号

国士舘大学教授
北 俊夫先生

今月のひとば

ゆう しゅう び かげ
有終の美を飾る

最後までやり通して立派な成果をあげることをいいます。有終とは、終わりを全うすることや締めくくりが見事であることです。

6年生への重点指導事項

- 2月は6年生にとって6年間でふり返る重要な時期です。子どもたちに6年間で大きく成長したことを実感させ、これまでの努力と頑張りに自信をもたせます。
- 中学校への進学に対する不安を取り除き、夢と目標と期待をもたせます。学級の「荒れ」を未然に防止する取り組みも欠かせません。

今月の
記念日

ふくの日

(2月9日)

山口県の下関では河豚(ふぐ)を「ふく」と発音します。「福」と同じ発音ですから、縁起のよい魚とされています。「ふ(2)」と「く(9)」の語呂合わせから、昭和55年に下関ふく連盟が制定しました。

6年間の成長を確認する

まもなく中学校へ進学していく6年生への指導は、ほかの学年と違い特に重要な意味をもっています。そのひとつは6年間の締めくくりをしっかりすることです。

これまでの学習や学校生活をおして、知らなかったことを知ることになり、できなかったことができるようになり、さらにわからなかったことがわかるようになりました。頭と心と体の成長ぶりを具体的にふり返り、達成感と成就感をもたせます。そしてこれまでの努力と頑張りに自信をもたせます。

具体的には学習面と生活面に分けてカードに書き出し、みんなに発表する場を設けたり、作文に書かせたりする方法もあります。表現する場を設けることによって、成長の喜びを共有したり共感したりすることができるからです。毎日の「帰りの会」や学校活動などの時間を活用するとよいでしょう。

ここでのポイントは「いろいろなことができるようになりました」「小学校での生活は楽しかったです」などのように、抽象的なふり返りではなく、成長の様子を学習や生活場面に即してできるだけ具体的に意識させることです。学校生活で使ってきたノートや作成し

た作品を紹介しながらふり返らせることも考えられます。

その際、どうしてここまで成長することができたのかについて深く考えさせます。自ら努力しただけでなく、友だちの協力や教師の指導、保護者の支えなどがあったことに気づかせます。周囲の人たちへの感謝の気持ちをもたせるようにします。

中学校生活への夢と目標を

この時期は、これまでの小学校生活をふり返るとともに、これからの中学校での生活や学習に対して、新たな夢と目標をもたせ期待感を高めます。中学校での新しい生活に希望をもたせることが何より重要です。

勉強が難しくなっていくだろうか。ほかの小学校から来た友だちと仲良くなれるだろうかなど、中学校に進学することに少なからず不安をもっている子どももいます。

「中1ギャップ」が課題になっています。中学校になると不登校の生徒数が急増するというデータがあります。学校によっては、中学校を訪問して授業の様子を観察したり中学生と交流したりする機会をつくっています。中学校の教師が小学校に出向いて、6年生に出前授業を実施することもあります。

小学校と中学校の教師同士が連携し、子どもたちがスムーズに進学していけるようにすることはこの時期の6年生への重要な指導事項だといえます。

「荒れ」の未然防止

6年の年度末(卒業の間際)になると、学級に規律がなくなり、学級が乱れてくることがあります。生活にどことなく落ち着きがなくなり、学級がざわついてくることもあります。これは「荒れ」の兆候です。

こうした場面においては、「核」になっている子どもが存在していることもあります。生徒指導の観点から、学級担任には鋭敏な観察力と十分な指導が求められます。

私立などの中学校を受験した子どもには特に配慮が必要です。合格した子ども、希望が叶えられなかった子どもを問わず、心が不安定になっていることがあります。落ち着いて学習できるよう特に目をかけます。

トラブルが起きてからどうするかではなく、起きないように未然に防止することが何より重要な学級の危機管理です。学級担任は気を引き締め、緊張感をもって、子どもの人間関係や言葉づかい、ふるまい、服装などの小さな変化を見逃さないようにします。

「役立つ教育情報」のテーマ一覧

「教育の小径」は、本号で100号を迎えました。1面ではその折々に役立つ教育情報を多方面にわたって提供してきました。これまでに取り上げたテーマを紹介します。

【平成20年度】

- 1 ・学ぶ意欲をどう育てるか
- 2 ・「かかわり合う力」を考える
- 3 ・「言語活動」をどう充実させるか
- 4 ・「活用力」を育てる
- 5 ・「通知表」の役割と書き方

【平成21年度】

- 6 ・授業改善の新しい視点
ー本年度の重点課題ー
- 7 ・「判断力」をどう考えるか
- 8 ・学校における「食育」のすすめ
- 9 ・自由研究できる力を育てる
- 10 ・小学校と中学校の連携
- 11 ・家庭での生活習慣ーどうつけるかー
- 12 ・体験活動の意義は何か
- 13 ・表現活動と表現力
- 14 ・保護者との個人面談ー配慮したいことー
- 15 ・伝統や文化に関する教育
- 16 ・絶対評価と相対評価
- 17 ・先輩教師に学ぼう

【平成22年度】

- 18 ・話し合いをどう組織するか
- 19 ・これからの学習評価と指導要録
- 20 ・学習計画作成の意義と実際
- 21 ・スタディー・ナビゲーターの開発
- 22 ・教師の研究と修養
- 23 ・「家庭学習ノート」の活用
- 24 ・読書する習慣づくり
- 25 ・表現活動と学習評価
- 26 ・評価規準とそのつくり方
- 27 ・教科等における道徳教育
- 28 ・外国語活動・推進上の課題
- 29 ・「総合的な学習の時間」の総点検

【平成23年度】

- 30 ・学習指導要領の全面实施
ー実施上の課題の再確認をー
- 31 ・ものやお金を大切にする教育
- 32 ・「個に応じた指導」の充実とは
- 33 ・夏休みを迎える子どもたちに
- 34 ・小学校におけるキャリア教育の推進
- 35 ・生涯学習と学校教育の役割
- 36 ・子ども理解の深め方
- 37 ・ものの見方・考え方を考える
- 38 ・いま、求められる授業力とは何か
- 39 ・「学力とは何か」にどう答えるか
- 40 ・「教科書が終わらない」の声
- 41 ・1年の締めくくり
ー子どもたちにどう話すかー

【平成24年度】

- 42 ・新教育課程ー2年目を迎えて
- 43 ・なぜ「教師間の協力的な指導」なのか
- 44 ・梅雨どきの生活指導
- 45 ・保護者会・個人面談ー話のヒント
- 46 ・夏休みをどう活用するか
- 47 ・異学年・異校種の交流活動

- 48 ・授業における生徒指導
- 49 ・なぜ問題解決的な学習なのか
- 50 ・保護者からの「クレーム」対応
- 51 ・教師の資質能力を考える
- 52 ・もうひとつの防災教育
- 53 ・自殺の問題を考える

【平成25年度】

- 54 ・年度始めの学級経営
ー見通しをもって段どりよくー
- 55 ・体罰という指導方法はない
- 56 ・判断力の指導と評価
- 57 ・なぜ子どもを評価するのか
- 58 ・教員のメンタルヘルス問題
- 59 ・学級担任の危機管理
- 60 ・子どもの主体性と教師の指導性
- 61 ・教師の言語活動は充実しているか
- 62 ・教育遺産の伝達・継承
- 63 ・敬語の指導は十分か
- 64 ・「博学連携」は進んでいるか
- 65 ・関心・意欲・態度とは何か

【平成26年度】

- 66 ・学習指導要領の趣旨の再確認を
ー各教科等の課題は何だったのかー
- 67 ・保護者会のもち方
- 68 ・給食の時間に「心の教育」を
- 69 ・学習評価はテストだけで十分か
- 70 ・夏休み／子どもとのつながりを
- 71 ・交通安全教育の新しい課題
- 72 ・「学校図書館」利用の活性化を
- 73 ・不登校問題にどう対処するか
- 74 ・学習の見通しと振り返り
- 75 ・伝統文化教育のアプローチ視点
- 76 ・ボトムアップで学校評価を
- 77 ・新年度に夢をもたせよう

【平成27年度】

- 78 ・「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」をどう読むか
- 79 ・校内研究のテーマ設定
ースローガンに終わらせないためにー
- 80 ・食物アレルギー問題への対応
- 81 ・授業検討会のもち方
- 82 ・9月からの教育活動に備えよう
- 83 ・社会参画力の育成ー社会科だけの課題か
- 84 ・自尊心をどう育てるか
- 85 ・子どもがつくる授業
- 86 ・「保険」についての指導を
- 87 ・「東京五輪・パラリンピック」ー学校の役割
- 88 ・アクティブ・ラーニングとは何か
- 89 ・児童指導要録の活用

【平成28年度】

- 90 ・次期学習指導要領改訂の方向性
ー中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」からー
- 91 ・授業参観日にどう備えるか
- 92 ・教員のコンプライアンス
- 93 ・夏の自由研究ー指導のヒントー
- 94 ・コミュニティ・スクールのいま
- 95 ・「教科書を」か、「教科書で」か
- 96 ・社会科見学を効果的に
- 97 ・自学力と共学力
- 98 ・教師の生き方ーオンとオフー
- 99 ・表現力とは何かー指導のヒント
- 100 ・6年生への重点指導事項
※毎年度の4月号は4ページ立てです。

「教育の小径」では、テーマをもとにシリーズで執筆してきた記事があります。以下、これまで取り上げてきたテーマとその趣旨です。
()内は取り上げた号数です。現在、継続中のものもあります。

○教科のまど (1~36号)

各教科・領域における個別的な課題を取り上げました。

○教えて！北先生 (37~60号)

学習や生活につまずきがちな子どもへの対応の仕方について、そのヒントを示しました。

○保護者会で使える話題 (61~96号)

保護者会で話題にしたい子どもを育てるポイントを紹介しました。

○学校の危機管理 (97~継続中)

学校で遭遇するさまざまな危機的な状況にどう対処するか。学校における危機管理のあり方について具体的な場面をもとに解説しています。

* *

○授業のスキル・アップ (1~36号)

授業力向上を目指して、授業を構成するさまざまな要素について解説しました。

○北先生の授業力向上術

(37~60号)

前半では筆者が体験してきた授業力向上の具体策について、後半では問題解決的な学習に焦点を当てて授業づくりのポイントを示しました。

○北俊夫の「3.11」体験談

(61~72号)

東日本大震災の当日、筆者が時間の経過とともに直接体験したことを紹介しました。

○ものの見方・考え方とは何か

(73~96号)

ものを見たり考えたりするときに必要な24の視点や方法を紹介しました。

○研究授業の目-12のポイント

(97~継続中)

研究授業で、参観者はどこを見ているかを解説しています。研究授業を実施する際に参考にさせていただきたいと思っています。

* *

○教育キーワード (1~36号)

主要な教育用語を解説しました。

○教育の動向 (37~継続中)

その時々を教育を巡る動向、文部科学省などから発信された情報をワンポイントで紹介しています。



執筆者からのひとこと

「教育の小径」誕生秘話

「教育の小径」発行のきっかけを作ってくださったのは、現在、文溪堂の相談役を勤めておられる川元行雄氏です。「先生方に教育の動向に関する情報を提供したい。できればリーフレットのような手軽に読めるものがよい」のひとことでした。当時(平成20年度)使用していた手帳には、7月28日(月)の欄に国士館大学の研究室でお会いしたことが記録されています。創刊号から編集を担当された近藤哲生氏も一緒にいました。近藤氏は当時営業企画を担当していました。

「手軽に」とは短時間に読めるもので、分量はA4版の表と裏です。およそのレイアウトはその場ですぐに決まりました。イメージが共有されていたからでしょう。ああだこうだと頭を悩ませるようなことはありませんでした。「教育の小径」は一瞬のうちに企画されたものです。

その後、私のほうで1年間の計画を作成し了解を得ました。創刊号は11月とし、さっそく執筆に取りかかりました。当初は取り敢えず1年間継続するつもりでスタートしました。

標題は、当初「花壇」という案でした。1~36号に毎月「今月の花」の記事があるのは、その名ごりでもあります。その後「教育の小径」に決まりました。1面の上部はいまも小道をイメージしたイラストになっています。

苦勞してきたこと

執筆に当たってもっとも苦勞していることは、新鮮な教育情報を収集することです。入ってくる情報もありますが、自ら追い求めなければ入手できない情報もあります。

8月に入ると、11月から1年間のテーマを設定します。現場のニーズや指導の悩みに応えられるように、またできるだけ重複が無いように心掛けました。さきに紹介した、1面の「役立つ教育情報」のテーマ一覧を見ると、同じものが二つと無いことに気づきます。テーマはこれまで「不易と流行」の原則に立って、時代が変わっても大事にしたいことと、時代の変化に伴って新たに重視したいことの両者を重視してきました。

また、どのような立場の方々にも読んでいただくかということも意識してきました。校長先生、中堅の先生、若い先生など、テーマによって対象を意識しながら執筆することもありました。そのうち、若い先生方に理解できるように分かりやすく書くことによって、いずれの先生方にも伝わるのではない

かと考えることもありました。

原稿は、編集と校正などを見越して早めに仕上げるようにしています。そのため、発行の時期になると、内容に変更が生じることもありました。急遽新しい原稿に差し替え、編集者の手を煩わせたこともあります。

毎年4月号は4ページ立てで構成してきました。年度を見通して重要な課題を取り上げて解説してきました。その多くは、学習指導要領に関することです。何をテーマにするか。毎年執筆の時期が近づくと頭を悩ませます。

学校や研究会などに伺ったとき、先生方から「『教育の小径』を毎回読んでいます。1号からすべてファイルしています」と言われたときは嬉しくなります。その瞬間、これまでの苦勞が吹っ飛んでしまいます。私はすかさず「内容は参考になっていますか」と問い返すことにしています。

反響があると、それが新たなアイデアを生み出す原動力になります。執筆への励みにもなります。

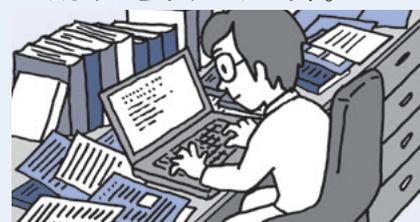
「教育の小径」への夢

「教育の小径」を執筆していても考えていることは、私自身が先輩の先生方をはじめ、大勢の方々から教えていただいたこと、これまでの経験で学んだことなど、優れた教育の文化遺産を伝達したいということです。

最近、地域によっては若い先生が増えていきます。指導力の習得をゼロから出発するのではなく、これまでの優れた教育技術に学んでほしいと願っています。そのほうが少しでも早く、少ない苦勞で大切なことを身につけることができるからです。先生方の教育指導に当たって、役立つ教育情報を提供し、先生方のお仕事を側面からサポートしたい。これが「教育の小径」に託している私の夢です。

これまでの「教育の小径」のバックナンバーは、「ぶんけい教育の小径」で検索すると、いつでも見ることができるようになっています。興味をもたれたテーマがありましたら、これまでの「教育の小径」にも目を通していただくと幸いです。

「教育の小径」を一人でも大勢の先生方に読んでいただくことを心から願っています。今後とも、ご指導とご支援をいただきたいと願っています。また、取り上げてほしいテーマや内容がありましたら、担当者までお知らせいただけるとありがたいです。



週案作成と届け出の意義

日々の授業や教育活動を計画的に行うためには、少なくとも週単位の指導計画を作成します。それを管理職に提出することにより、計画の内容を管理職と共有し、必要に応じて指導や助言を受けることができます。

学級担任が週案を作成し、管理職に提出することには、危機管理の観点から次のような意義があります。事例をとおして考えます。

ある保護者から「わが子が交通事故に遭ったのは、学校で交通安全教育を行っていなかったからだ」という訴えがありました。ところが、その子どもの学級担任は、週案に交通安全指導を行った事実を記載していました。校長の検印もありました。このことが動かぬ証拠となって、保護者の訴えは退けられました。

理科の時間に水素を取り出す実験中フラスコが割れ、子どもがけがをしました。担任の責任が問われました。しかし、授業の概要が書かれた週案に校長の検印があったことから、管理職は共に問題の解決に当たってくれました。

忙しさに追われて、週案を作成することがつい疎かになりがちです。管理職に提出することを躊躇する傾向があるかもしれません。週案を作成し、管理職に提出することには教育活動を計画的に実施し、教育効果を高めるといふ本来の役割とともに、事故の発生など万が一のときには身を守る重要な役割を発揮します。

忙しい毎日ですが、授業の事前に週案を作成します。指導において一部又はすべてが変更された場合には修正しておきます。計画とともに指導の結果を記録に残す習慣をつけたいものです。

教育の動向



運動会の時期

2月に入ると、各学校では来年度の教育課程の編成作業に入ることでしょう。学校行事を年間の計画にどう位置づけるかということも課題になります。例えば運動会の時期です。

NHKは本年度の運動会の開催時期を調査しました。東京の23区と政令指定都市の約3700校を対象にしたものです。それによると、昨年5月から6月に実施した小学校が約66%だったといいます。3校のうち2校は春に行ったこととなります。運動会といえば秋の季節ですが、いまでは春の実施が一般的になってきたようです。

理由にはいくつか考えられます。秋には運動会のほかに、修学旅行や音楽会、展覧会など大きな学校行事が集中しています。行事の分散化があげられます。また、近年9月から10月にかけての時期は地球温暖化の影響でしょうか。厳しい残暑が続くようになりました。熱中症になることを避けるために春に移行したようです。

運動会を春に実施した場合、4月に入学したばかりの1年生が集団行動に十分慣れていないという課題があります。6年生が最高学年としての自覚や責任ある行動がまだ備わっていないという指摘もあります。いずれも子どもの実態を踏まえたものです。

運動会の時期については多方面から検討し、総合的に判断したいものです。

シリーズ 研究授業の目 12のポイント 4

学習成果を生かしているか

授業は1時間1時間が独立しているわけではありません。前時の学習との関わりがあり、次時の学習につながっているものです。子どもたちが前時まで習得した知識や技能、見方や考え方を生かしながら本時の学習を深めることは重要な学習の仕方です。

例えば算数では台形の面積を求める公式を導き出すとき、子どもから次のような発言を聞くことがあります。学習成果を生かしている発言です。

「台形を二つの三角形に分けると、三角形の面積を出す公式を使って求めることができます。」

また、次のように算数で学んだことを社会科のグラフの読み取りの場面で生かしている発言もあります。

「算数ではグラフの読み取り方につ

いて、全体の傾向をとらえることの大切さを学びました。これを生かすと、〇〇市の人口は増えているのに、ゴミの量は逆に減っていることがわかります。どうしてかなと思いました。」

この発言はグラフの読み取りをとおして新たな疑問に気づいています。

研究授業などを参観していて、その教科で学んだことだけでなく、ほかの教科で学んだことを生かしながら学習している姿に接すると、学習に深まりを感じます。と同時に、子どものなかに「学びのネットワーク」が張りめぐらされているように思います。

こうした発言が授業のなかで出されるようにするには、教師自身が教科間の関連を意識していることが不可欠です。教師が「指導のネットワーク力」を発揮することによって、学習成果を生かす子どもが育っていきます。

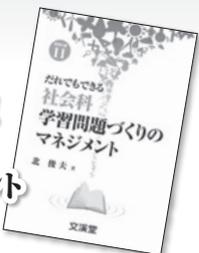
INFORMATION

北俊夫先生の著書

定価：各950円+税

最新刊

だれでもできる
社会科
学習問題
づくりの
マネジメント



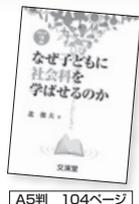
A5判 104ページ

こんなときどうする！
学級担任の
危機対応
マニュアル



A5判 96ページ

なぜ子どもに
社会科を
学ばせるのか



A5判 104ページ

言語活動は
授業をどう変えるか
—考え方と実践のヒント—



A5判 112ページ

編集後記

記念すべき第100号は、特別増大でお届けいたしました。8年以上にわたる歴史をお感じいただけましたでしょうか。

「教育の小徑」、これからも発行を続けてまいります。引き続きご愛読のほど、よろしく願いいたします。(F記)

企画・編集：ぶんげい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2017年2月1日